



## 今、日本で、世界で、起こっていること

東北福祉大学特任教授 有田 和正

### ●南米チリ鉱山落盤事故 33人奇跡の救出●

世界中が注目した「奇跡の救出劇」であった。

2010年8月5日、チリ北部コピアポ近くのサンホセ銅鉱山で、落盤事故があり、作業員33人が地底700mのところ閉じ込められた。8月22日、地下から引き上げられた掘削ドリルに「33人全員元気」とのメモがはさまれており、作業員の生存が確認された。

地上では、救出作戦が国をあげて練られ始める。チリ政府は救出用の立て杭を並行して3本掘り進めた。このうち9月5日に掘削を始めた2本目の立て杭が貫通したのである。

狭い立て杭を一人ひとりつり上げるための救出用カプセル「フェニックス」が用意された。カプセルに塗られた白・青・赤はチリの国旗のイメージだという。

『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』（以下、地図帳）p.76「南アメリカ州」で、チリの国旗を確認してみるとよい。



チリ

『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』  
p.76

救出用立て杭（全長624m、直径約70cm）の内壁の一部を補強する工事が完了し、ビデオカメラによる内部の検査を経て、救出用カプセルを地下約610mまでおろしてみる実験にも成功し、事故発生から2か月あまりで、前代未聞の救出劇は秒読み段階に入った。

10月13日、この世界的にも例のない救出作業を報道するため、世界から1000人も報道陣がおしかけた。現場の当日の気温は3℃という寒さだった。そのなかに待ちわびる家族や鉱山関係者、大統領を中心とした政府関係者らがわきたっていた。日本とは反対の南半球に位置するチリに着目し（地図帳p.75～76）、現地の気温、中継されたときの人々の服装などをあらためて思いおこさせてみるとよい。そして、地上とは異なり、地下700mのところは、気温35度、湿度80%というサウナのような状態であることも指摘しておきたい。作業員たちがその中でどのように地下での避難生活を送っていたのか——33人は地下での生活をきちんと記録していた。約22時間で33人全員が引き上げられ、世界史上例のない「奇跡の救出」が完了した。

なお、今回の救出には、さまざまな国が協力している。日本は、下着やビニルの気泡緩衝材（梱包する際に使用されるもの。プチプチ、エアパッキンなどともいわれる）を送ったという。ビニルの気泡緩衝材は、作業員たちがすることがないときに一つずつつぶしていたという。思わぬものが役立ったようである。

銅の産出量はチリの中心的なもので、世界中に輸出されている。今回の落盤事故はチリにとってかなりの痛手であったろう。最近では銅の需要が高まり、低賃金の労働者が多数の中小鉱山で働いているという現状だが、資金力の乏しい中小鉱山では安全管理がおろそかになっていることが今回の事故で明らかとなった。

世界中をわかせた救出劇だが、今後、チリ政府には、鉱山での安全管理の徹底強化が求められる。

## ● 貧しい村を救ったパイナップル ●

「私たちが今あるのは、パイナップルのおかげです」。

沖縄県北部（やんばる・山原）にある東村<sup>ひがしそん</sup>の人の言葉である。沖縄では、心身を元気にする食べ物「ぬちぐすい（命の薬）」というが、東村の人にとっては「パイナップルは、ぬちぐすいどころではない、貧しい村を救った、命の作物そのもの」なのである。

沖縄は日本国内でほぼ唯一のパイナップルの産地である。なかでも東村は、最大の生産量を出している（地図帳p.15）。かつて収穫期は夏であったが、品種改良とビニルハウスの活用で、今では一年中収穫できるようになっている。

パイナップルは、南アメリカが原産地である。アメリカの南北戦争（1861年）を契機にして、軍隊用に発達した缶詰産業と結びついたという。

日本も戦前に植民地であった台湾で生産を始めた。終戦後は、アメリカ合衆国との地上戦で痛手を受けた沖縄の復興策にパイナップルづくりを導入した。農業に向かない本島北部の酸性土壌が幸いにもパイナップルには適していた。このため、東村を中心に開墾や品種選別の努力を重ね、沖縄の基幹事業となった。林業以外に産業のなかった村の暮らしは豊かになった。しかし、輸入自由化で外国産缶詰に押されて、生産量が激減した。それで地元ではパイナップルを守ろうと必死である。

かつて20以上あった缶詰工場はいったん0になったが、現在は新たに東村に工場ができた。缶詰の国内シェアは低いが、東村が県内外の大手スーパーで実施する試食販売は好調だ。

また、野菜のように日常の食生活に取り入れてもらおうと、料理メニューの開発に取り組んでいるという。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』p.15